壁のない町

鹿内ひかる

登場人物

・朝日つばめ（２１）　…大学４年生。交通事故で記憶を失くす。

＜幼馴染＞
・楡野夏鈴（２１）　…つばめの中学時代の親友。元気系なキャラだけど秀才。
・木嶋由実（２２）　…つばめとは中高が一緒。高校時代はバスケ部。

・あんず（２１）　…つばめとは中高が一緒。たまにヒヤッとする発言をする。
・花（２１）　…つばめの中学時代のクラスメイト。
・宙（２２）　…つばめの中学時代のクラスメイト。母親が小学校の教師。

＜高校時代の回想＞※セリフなしイメージカット
・桜庭愛衣（１５）　…つばめと同じクラス（1A）の友達。
・原航太（１６）　…愛衣の彼氏。一希と同じクラス（1D)。
・鈴木葵（１５）　…愛衣と同じクラス（1A)。愛衣の前の席。
・高井一希（１６）　…バスケ部。由実の友達。航太と同じクラス（1D）

＜アカゲラ町の町民＞
・朝日かおる　…つばめのお母さん。役場の職員。
・楡野聡子…夏鈴のお母さん。看護師。
・坂井さん　…役場の職員。かおるの同僚。あきと同い年・同じクラスの娘がいる（仁香）
・河本さん　…看護師長。聡子の同僚。嫌味。つばめ達と同い年・違う学校の息子がいる。
・中村大輔　…駅前に住んでいる郵便局員。かおるとはプライベートや仕事で顔を合わせる。
・橋本さん　…農家のおばあちゃん。つばめが高校時代、お手伝いさせてもらっていた。
・楡野あき（１２）…夏鈴の妹。アカゲラ中学校の６年生。夏鈴の２つ下。
・楡野春翔（16）…夏鈴の妹。高校１年生。夏鈴の２つ上。

＜市立ハヤブサ病院＞
・荒井誠先生　…脳外科の先生。つばめの担当医。

Cast

・朝日つばめ役　寧

＜幼馴染＞
・楡野夏鈴役　辻山姫子
・木嶋由実役　堀田ゆりあ

・あんず役　北村小麦
・花役　来田玲子
・宙役　野戸駿祐

＜高校時代の回想＞
・桜庭愛衣役　水井さくら
・原航太役　三村大心
・鈴木葵役　櫻口翼
・高井一希役　藤村真大

＜アカゲラ町の町民＞
・朝日かおる役　佐野たまき
・楡野聡子役　横澤圭子
・坂井さん役　大坂文人
・河本さん役　赤沼加奈子
・中村大輔役　中川 Patrick 宗士

＜市立ハヤブサ病院＞
・荒井誠先生役　大島卓先生

Staff

企画プロデュース	鹿内　ひかる
	岩田　澄香
	辻山　姫子
脚本	鹿内　ひかる
撮影	鹿内　ひかる
美術	鹿内　ひかる
	岩田　澄香
	辻山　姫子
	太田　麻友
	上杉　汐葵
録音	鹿内　ひかる
	佐野　凪未
	岩田　澄香
	辻山　姫子
	土井　香寧
	上杉　汐葵
	宮澤　なな
照明	辻山　姫子
編集	鹿内　ひかる
助監督	辻山　姫子
スタイリスト	鹿内　ひかる
	土井　香寧
監督助手	佐野　凪未

	岩田　澄香
	土井　香寧
	上杉　汐葵
	宮澤　なな
編集助手	辻山　姫子
ロケーション協力	大坂　ひとみ
	高柳　亜季
車輌担当	辻山　姫子
タイトルロゴ	岩田　澄香
	辻山　姫子
広告ビジュアル	鹿内　ひかる
音楽	甘茶
	山谷　知明
主題歌	「愛の夢 第 3 番 変イ長調 」
	作曲：Franz Liszt
監督	鹿内　ひかる

〇S1：病院・面談室・昼
かおるとつばめが面談室にいる。
かおる、顔を下にしてスマホで記憶障害について調べている。
つばめ、ぼーっと壁を見つめる。

S：ドアの鳴る音　コンコン　ガラガラ
医者が元気よくドアを開けて、入ってくる。
4 人がけの机につばめとかおるが並んで座り、つばめの向かいに医者が座る。
かおる、スマホを机に伏せて置き、姿勢を正す。
つばめ、小さく会釈する。

医者「お待たせしましたー！いよいよ退院ですねー。怪我の方が治ったので退院することになりましたが、まだ中学校から事故までの記憶が思い出せない状況で不安ですよね…。」
かおる「ありがとうございます…。お世話になりました…。
あの、記憶は戻るんでしょうか…。」
医者「戻ってくる可能性もありますが、時間がかかるかもしれません。定期的に病院に通いながらゆっくり経過をみていきましょう。何か不安な点はありますか。」
つばめ「…大丈夫です。ありがとうございます。」

〇S2：病院・駐車場・昼
つばめ、車から数メートル離れたところでぼーっと空を見上げる。
かおる、後ろに入院してた時の荷物を積み、後ろのドア？を閉める。
かおる、つばめに、運転席のドアに手をかけながら声を掛ける。

かおる「つばめ、行くよー？」

つばめとかおるが車に乗る。

M つばめ「2023 年 6 月 10 日、午後 7 時 30 分。
私は大学の帰り道に交通事故に遭い、記憶を失った。」

つばめの窓越しの表情。

暗転する。

〇S3：実家・玄関・昼
病院が終わって、買い物をして、実家に帰ってきた。
かおる、家の鍵を閉めている。
つばめ、しゃがんで靴を脱いで揃えている。立ち上がり、不思議そうに玄関を見る。

つばめ「ここにあった私のお花どうしたの？」
かおる「ずっと前に枯れて、自分で捨ててたよー」
つばめ「そうなんだ…」

かおる、キッチンに買い物かごを持っていく。キッチンからつばめに声をかける。
つばめ、リビングから窓の外を覗く。

かおる「明日のクラス会だけど、かっちりした感じなのー？」
つばめ「夏鈴ちゃん？からはみんな私服でーって LINE 来てた。」
かおる「あーその方が楽でいいね。」

〇S4：アカゲラ中学校・廊下・昼
つばめはアカゲラ中学校を 10 年前に卒業している。同学年は 10 人。
クラス会の参加者は 6 人でつばめ、夏鈴、由実の他に 2 人の女子と 1 人の男子。
なんとなくつばめ・夏鈴・由実の 3 人、あんず・花の 2 人が固定化した仲良しで、
宙が仲良し（相方男子）が来なかったイメージ。陰キャめな 3 人女子来ていない。
みんなつばめのために胸に名前の書いたガムテープ名札を貼っている。
つばめ以外の人の顔は写さない

つばめが教室に入ろうドアに手をかけた時、反対側の廊下から夏鈴が走ってくる。

夏鈴「え、つばめじゃん！！」

夏鈴が体当たりのようにつばめに抱きついてくる。
つばめの表情が曇り、夏鈴を優しく引き離す。
つばめが夏鈴の名札を覗き込む。

つばめ「えっと…すみません…。」
夏鈴「あーごめんごめん、あ…夏鈴です！」

つばめの表情が明るくなる。
夏鈴がつばめの両手を両手で掴み、握手のようにブンブン振る。

つばめ「あ、LINE で色々教えてくれてた、夏鈴ちゃん」
夏鈴「そうそう、その夏鈴！もうみんな来てるからとりま入ろー！」

夏鈴が教室のドアを勢いよく開ける。

〇S5：アカゲラ中学校・教室・昼
ふいに参加者のみんながドアの方を見る。

夏鈴「つばめ来たー！」

つばめ、みんなを見て少し笑顔で会釈する
みんなつばめの方に寄ってくる。
口々に言うセリフは口元のカット、話している人の方向にパンする

由実「おー！え、大丈夫？色々」
あんず「車に轢かれたんでしょ？！」
つばめ「あ…うん、そう」
花「え、記憶ってどんくらいないの？」
宙「中学から今までが抜けてるって誰か言ってなかった？」
由実「今のつばめ、都会マインドだからなんでも聞かない！」
あんず「うちらのこともやっぱ全然わかんない？」

つばめが引き攣った笑顔で夏鈴を見て、もう一度みんなの方を見る。

つばめ「ごめん…。」
由実「いや、仕方ないから大丈夫だよ。」
花「パパのことは覚えてるの？」
あんず「つばめのお父さん、再婚したんでしょ」
つばめ「え…」
由実「つばめの中ではまだお父さんとお母さん別れたばかりなんだから

やめてあげてよ」
あんず「ごめんごめん、でもあのお父さん、一回、つばめのこと取り戻しに来てキモくなかった？（笑)」
花「警察官だったんだっけ？」
あんず「自衛官じゃなかった？」
宙「いや、救急の外科医な」
花「全然違った笑笑」
宙「つばめのお父さんが事故の傷縫ってくれたみたいな噂あったよな」
つばめ「あ…うん。そうみたい。担当医は変わったけど。」
あんず「でもお父さんとのこともだけど、私たちのことも忘れちゃってちょっと寂しいよね。」
つばめ「ごめんね…。」
宙「つばめは悪くないし、戻る可能性もあるんでしょ」
つばめ「いや、うーん…」

みんながお互いの顔色を伺う
夏鈴が大きく手を叩く

夏鈴「ちょっ、待って、みんな久々だからしょげんのやめよ！笑」
由実「とりあえず座ろう？」
花「たしかに」
あんず「それな」

席に着く

夏鈴「え、この感じ、やばい懐かしい！」
宙「廃校して前の机とかは無くなっちゃったけどな」
由実「でもまあこんな感じで給食とか机くっつけてたか…」
花「夏鈴とつばめは放送委員だったからあんま教室いなくない？」
夏鈴「たしかに放送室で食べてたわ笑」
あんず「夏鈴たち、放送委員だったね、たしかに。思い出したわ、夏鈴の曲の好みってお兄ちゃんにめっちゃ影響されてたからさ」
宙「春翔くんの好きなアーティストが増えるたびに、お昼の放送の曲偏るやつね」

由実がつばめに語りかける

由実「春翔くんっていうのは２個上の夏鈴のお兄ちゃんね」

つばめ、なーるほど、という感じで大きく頷く

宙「春翔くんってもうすぐ結婚するんでしょ？」
夏鈴「まだ決定じゃないけど、なんで知ってんの笑笑」
宙「母さんが、アカゲラ小の先生から学校の窓からふたりが夏鈴ん家の方に歩いて行くの見たって聞いたって言ってた」
夏鈴「あー、あきの担任だった先生か。校長になったって聞いたわ。なるほどね。」

由実がつばめに語りかける

由実「あきちゃんは２個下の夏鈴の妹ね」
つばめ「夏鈴ちゃんは３人兄妹？」
夏鈴「そー！２個上のお兄ちゃんと２個下の妹！」
夏鈴、つばめに向かって W ピースする

つばめ「みんなもよく知ってるんだね」
宙「いや、そーでもない笑」
花「仲良しなわけじゃないけど、まあ色んなとこで関わるくらいだよ」
宙「夏鈴が春翔くんの影響受けすぎるから夏鈴経由で春翔くんの流行がわかって詳しくなる笑笑」
花「学年被ってるしね。」

花がジュースを一口飲む。ジュースを置く。
あんず、由実を見つめながらジュースを飲む。
由実、あんずの視線に気づいて「ん？」って顔をする。
あんず、ジュースを持ちながら話し始める。

あんず「由実もさ、結構付き合う人に影響されがちだよね」
由実「え、そうー？」
あんず「なんか高校の時、一回、鈴木くんだっけ？なんかいつも頭くっつけて YouTube みてたって話あったよね」
由実「違う違う！それ愛衣ちゃん」
あんず「愛衣ちゃんか！あ、そうだ！なんか修羅場ったやつか。」

夏鈴「愛衣ちゃんって誰だ！」
由実「いや、あんずとつばめと私、下高だったじゃん。愛衣ちゃんはつばめと同じA組の子だったんだけど…」

由実、つばめの顔色を伺いながら覗く。
つばめ、不思議そうな顔をして、ジュースを一口飲む。

あんず「なんか、愛衣ちゃん、そん時、D組の原くんと付き合ってたんだけど…」

〇S6：下野高校・教室・夕方
愛衣が後ろの席、鈴木が前の席。鈴木が椅子を跨いで愛衣の机に肘をおいてスマホを持ち、頭をくっつけて2人でYouTubeを見て笑っている。
近くの席のつばめ。つばめが自分の机の中にあった筆箱を取りにくる。

あんず「教室で愛衣ちゃんが鈴木くんとイヤホン共有してYouTube見てるのをみたつばめが、2人がいい感じなんだって勘違いしたのが広まっちゃったのさ！」

〇S7：アカゲラ中学校・教室・昼

花「うわー、それで学年全員がそう思っちゃうパターンか」

つばめ、目見開いて下を向く。

宙「あーなんか俺それ他校だけどバドミントン部だったから下高のバド部の奴から聞いた気がするわ。」

〇S8：アカゲラ町・外・夕方（イメージカット）
高校時代のつばめと由実がアカゲラ町の町を一緒に帰っている途中。

宙「つばめが由実にその話して」

〇S9：下野高校・体育館・昼（イメージカット）
部活の休憩中。汗をかいた 2 人が壁にもたれかかって体育座りでスポーツドリンクを飲んでいる。

宙「由実が同じバドミントン部の奴に話したら、」

〇S10：下野高校・教室・昼（イメージカット）
一希と原がお弁当を食べている。
原が「は？」って驚いて咽せる。

宙「そいつが彼氏くんの原くん？と同じクラスで原くんが怒って」

〇S11：下野高校・教室・夕方（イメージカット）
愛衣の机の上にスマホ。隣の席にはリュック。
原はリュックを背負った状態。
前の席には鈴木がいて立ち上がって、原に必死に無実を訴えている。

宙「愛衣と喧嘩して破局したってやつでしょ？」

〇S12：アカゲラ中学校・教室・昼

由実「あーそんなこともあったねえ。その後、愛衣ちゃんさ、自分が原くんに振られたこと、つばめのせいだって逆上してきて大変だったんだよ〜」
夏鈴「でも自分が周りに誤解されるような態度取るのが悪くないか、それ」
あんず「っていうか普通に彼女が違う男と頭くっつけてるだけでも嫌じゃない？」
つばめ「やばいね…私。」
由実「いや、つばめはやばくないよ。」
花「え、つばめが高１の時、学校行けてなかったのってそれ？原因」
あんず「そーだよ、ね？」
由実「まあ…うん」
つばめ「え、学校行ってなかったの？」
由実「いや、数ヶ月で来れるようにはなったんだけど、愛衣ちゃんがつばめを悪く、こう、うーんとね…」
あんず「いやまあ、悪口ひどかったんよ」
つばめ「え、でも私が憶測で広めちゃったことに怒ってたんだよね？」
由実「まあそうなんだけど…。いや、それに関しては私が部活で一希に言っちゃったのが悪いのもあるから…。そんときはごめんよ…。」
あんず「そもそも、憶測で広められたことに怒ってたくせに自分も憶測でつばめのあることないこと悪いように言って、周りも周りでそれ信じてつばめのこと避けてるのがキモかった。」

夏鈴「まあ火のないところに煙は立たないからね。愛衣ちゃんは絶対なんか心当たりあったから逆に怒ったんじゃない？」
あんず「いやそう、破局はその前から時間の問題だったと私も思ってた。」
由実「愛衣ちゃんモテるからなぁ」
花「今何してるの？」
あんず「夜やってるんだっけ？」
由実「ハヤブサ市でかなり売れっ子のニュークラ嬢」
夏鈴「まじか！たらしの才能開花じゃん笑笑」
由実「一希とこの間会ったときに誰かから聞いたって言ってた笑」
宙「ソース薄！笑
っていうかそのバド部の男子なんでも喋るじゃん笑」
由実「一希、情報屋だから笑」
宙「やば笑」
由実「しかも就職先、週刊誌の記者だからね笑」
夏鈴「がちの情報屋じゃん笑笑」
花「就職ってみんな決まった？」

みんな様子を伺いながら頷く

夏鈴「夏鈴はまだ３年だからこれからだー！」
つばめ「え、夏鈴ちゃん、３年生なの？」
由実「浪人したんだよね」
夏鈴「しかも高校浪人ね笑」
あんず「それもさ、つばめがさ笑笑」
由実「ちょっとあんず…」

つばめが不安そうな顔で夏鈴を見つめる

夏鈴「いや、高校受験失敗した時さ…。高校浪人するやつなんて珍しいじゃん？
それで、つばめに相談したんだよね。」
花「夏鈴、小学生の時からずっと上高の進学に拘ってたしね」
夏鈴「いや、上高に入れば進路安泰じゃん」

由実がつばめの耳元でささやく

由実「上川高校はハヤブサ市にあって私たちの下野高校より偏差値が 15 くらい高

い超進学校ね」

夏鈴「模試の判定もずっとAだったのに、なんか入れなかったんだよねえ。
今でもあれはマジで謎。」
宙「たぶん回答欄ミスったとかそんなとこな気がする。」
夏鈴「それな。絶対もう一回受ければ受かると思ってたから、浪人するって話をつばめにしたら、つばめにしか言ってないのになぜか巡り巡ってお母さんまで届いて、普通に大喧嘩した笑」

〇S13 実家・ダイニング・夜（イメージカット）
つばめとかおるが夜ご飯を食べている。

宙「たぶん、つばめがつばめのお母さんに話して、」

〇S14 役場・自動販売機の前・昼（イメージカット）
かおると坂井が自動販売機の前で缶コーヒーを飲んでいる。

宙「あきちゃんと同じクラスに娘さんがいる教育委員会の坂井さんに話して、
あきちゃんと同じクラスにお孫さんがいる坂井さん家のお隣の泉さんとかに伝わって…とかそんなとこだ。」

〇S14+ 住宅街外・家と家の間・夕方（イメージカット）
坂井さんと泉さんがお話ししている

〇S15 アカゲラ中学校・教室・昼

夏鈴「まあなんか、あんときは知り方が腹立つ感じだったんだよね」
あんず「嫌味言われたやつか」
夏鈴「そー」

夏鈴がつばめの方に向き直す

夏鈴「なんかね、うちのお母さん看護師なんだけど、買い物の帰りに、うちのお母さんの病院の看護師長に会って。めっちゃムカつく奴なのさ！それで」

〇S16 スーパー・駐車場・昼・回想
聡子と夏鈴が買い物終わりに買い物袋を一つずつ持って駐車場を歩いている
聡子が車の鍵をカバンの中から探している
車の影から空の買い物かごを持った河本が出てくる

河本「楡野さん！こんにちは！」
聡子「河本さん！こんなとこで！お疲れ様です〜」
夏鈴「こんにちは〜」
河本「夏鈴ちゃん、久々！あ、聞いたよ！高校浪人するんだって？」
夏鈴「え？あ、まだ悩んでいて…」
河本「高校受験なんて落ちる子いないから高校浪人する勇気はすごいと思う！」
夏鈴「あ、はは…（苦笑）」
河本「うちの息子も上高受けたのよ！」
聡子「あーそうだったんですね！」
河本「まあうちの子は運良く入れたから、来年、夏鈴ちゃんが入学したら仲良くしてやってね。１学年上になっちゃうけど。」
夏鈴「あ、了解です笑」
河本「じゃあ楡野さん、また病院でね。」
聡子「はい、お疲れ様です〜」

〇S17 アカゲラ中学校・教室・昼

花「あからさまな嫌味すぎ笑」
夏鈴「マジで腹立つよね！」
つばめ「それも元はと言えば…」（つばめにフォーカスして撮る）
夏鈴「いやでも、私もつばめにちゃんと”絶対誰にも言わないで”って言ってなかったんだよね〜」
あんず「まあ今日あった話は、親に聞かれるよね」
夏鈴「まあ別に良いんだけど」
つばめ「え、良いの？だって高校時代の規模と違って町中なんだよ？！」
夏鈴「おーん」
由実「でも結構、夏鈴ママと戦ってなかった？」
夏鈴「まあお母さんは、現役志向だったから。
落ちたら滑り止めの私立行くと思っていたようだ。」
あんず「まあそうなるよね」
夏鈴「なんのための滑り止め？受験にも高いお金払っているんだよ？

って詰められてた」
由実「まあ…おっしゃる通りでございますね。」
つばめ「私のせいでまちを歩けなかったりしなかった？」
夏鈴「そんときは、時の人だったから、会うたびに可哀想扱いされたけど
別にそんな可哀想なのかな？とか思ってた笑
むしろ、一年おやすみ期間できてラッキー！くらい」
花「みんなのんびりしているようで、それなりに忙しくて、余裕がないから
とりあえず可哀想って言い合って適当にコミュニケーション取ってるだけ」
宙「だからつばめが気にすることじゃない」
夏鈴「みんな適当なネタを常に欲しがるのよ、
今だって多分、つばめが記憶喪失だって話で町中、持ちきりだよ笑」
つばめ「え、全人口とか…？」
由実「わかんないけどまあ、みんな、なんだかんだつばめのこと知ってるんだよね、
アカゲラ南に住んでて、役場に勤めてるシンママかおるさんの一人娘」
宙「ハヤブサ市の大学生だったけど事故に遭って記憶を失って実家戻ってきたくらいはみんなに知られてるよ、たぶん」
つばめ「みんなってどのくらいみんな？」
由実「それはわかんないよ笑」

〇S18 イメージカット　外の風景とか時間がわかるやつ挟む

〇S19 実家・リビング・夕方
つばめがリビングに入ってくる
かおるがキッチンから声をかける
つばめ「ただいま〜」
かおる「おかえり〜！どうだった？」
つばめ「何が？」
かおる「何か思い出した？」
つばめ「そんな簡単なわけないじゃん」
かおる「まあそうだよねぇ」
つばめ「でも自分が、口が軽すぎる人間になってしまっていたことはわかった」
かおる「えー？」

S：玄関のチャイム音　ピンポーン

かおる「たぶん坂井さんだから出てー」

かおるが叫ぶ

かおる「お母さんの職場の人！」

〇S20 実家・玄関・夕方

つばめが玄関を開ける

つばめ「はーい」

坂井「つばめちゃん～！大丈夫～？」

つばめ「あ、はい。元気です。」

坂井「突然、かおるさんが有給取るから何事かと思ったらつばめちゃんの事故だって聞いてもう本当にびっくりしたよ～！いや～生きててよかったね、本当に！」

つばめ「おかげさまで生きております。」

坂井「でも記憶がないんだもんね。俺のこともわかんないよね。」

つばめ「すみません…。」

坂井「良いの、俺なんて 1 番最後に思い出してくれれば！」

かおるがキッチンから玄関の方に慌ただしくやってくる。

かおる「坂井さん、渡したいものがあるってどうしたの～！」

坂井「かおるさん！お疲れ～！持ってきたよ！」

坂井が紙袋をつばめに渡す

かおるとつばめが紙袋の中を覗く。

坂井「それね、毎年出てるアカゲラ町の小中学生の文集なんだけど、
うちの下の子とつばめちゃんの作文が載ってる分！
『かおるちゃん、そういうのとっておいてなさそうだから持ってきな！』
ってうちの奥さんが笑」

かおる「なんでわかるの笑」

坂井「自分の子の作文さえあれば良いみたいな感じでしょ笑」

かおる「はい…笑」

坂井「つばめちゃんだけじゃなくて、つばめちゃんの周りの子達の作文を読むだけでもこの町で過ごした時のことを、思い出せなくても、理解できるんじゃないかなって、思って持ってきてみました！」

かおる「すみません、ありがとう…。

坂井さんの下の娘さんってつばめの二つ下だっけ？」
坂井「そうそう！楡野さんとこのあきちゃんと同い年！夏鈴ちゃんの妹の！
夏鈴ちゃんとはもう会えた？」
つばめ「さっき、クラス会で…」
坂井「そっかそっかぁ。あの子、すっごい心配してたって風の噂で聞いてたから
逆に心配だったよ笑　元気そうだった？」
つばめ「とても元気な子でびっくりしました。」
坂井「夏鈴ちゃんはちょっぴりおせっかいなイメージだけど、優しくて良い子だし、
いつもつばめちゃん、由実ちゃんといたからいっぱい話すと良いと思う。」
つばめ「そうだったんですね。」
坂井「俺にもできることがあったらなんでも言ってね。」
かおる「いや本当にありがとうね～」
坂井「じゃあ、それ返すのいつでもいいからゆっくり読んで！」
つばめ「ありがとうございます」
坂井「じゃあかおるちゃん、また月曜日に！」

坂井、手を振りながら帰って行く。かおるも手を振る。つばめ、会釈する。

〇S21 実家・リビング・夕方
つばめとかおる、晩御飯を食べている。向かい合わせで座っている。
つばめ、隣に文集を開いて置いて、文集を読みながら食べる。
かおる、テレビ見ながら食べる。

かおる「つばめ、明日ハヤブサに一旦、戻るの？」
つばめ「戻りたいんだけど…」
かおる「まあまだ１人で電車乗るの怖いか～」
つばめ「うん…。」
かおる「でも部屋に荷物取りに行きたいよね」
つばめ「うん。思ったより家に何もなくてびっくりした。」
かおる「そりゃ、もう一緒に住んでないからね。学校の休学手続きもあるし、
明日電車乗る練習も兼ねて、一緒にハヤブサ行こうか。」
つばめ「お母さん、次の日お仕事だけど大丈夫？疲れない？」
かおる「疲れるけど、仕方ないからいいよ。
記憶戻ったらつばめにいっぱい頼み事するから笑」
つばめ「怖いね笑　ありがとう。」
かおる「はーい」

〇S22 アカゲラ駅前・歩道・朝
つばめとかおるが歩いている。
2 人の前から中村が歩いてくる。

かおる「中村さん！おはようございます！」
中村「ん…」

中村、目を凝らしてみる

かおる「朝日です！朝日！」
中村「あー！朝日さん！おはよう！」
つばめ「おはようございます。」
中村「そういえば、つばめちゃん大丈夫？事故にあったって。」
かおる「ここに引っ越してきた後からの記憶がなくなっちゃったんだよね。」
中村「なんか聞いたよ～。大変だったね～」
つばめ「中村さん…とはどのような関係だったんですか？」
中村「関係なんて全然ないよ笑笑」
かおる「ここ数年、お母さんが郵便局に行く時にお会いするだけ」
中村「実はつばめちゃんとは初対面じゃないかな。」
つばめ「そうなんですか！」
中村「話にはよく聞いているから、知った気になってたけど。」
つばめ「あー」
中村「普通の話だよ笑
この町の子どもたちはよく話してくれる子が多いから、困ったことがあったときにすぐに助けてあげられる。
つばめちゃんがいじめられてた時も、由実ちゃんがすぐに教えてくれたから、みんなにたくさん助けられてたよ。」
つばめ「不登校だった時、私、なにしてたんですか？」
かおる「町の色んな人のお仕事をお手伝いさせてもらったの。」
中村「さすがに郵便局には来てくれなかったかー」
かおる「お仕事的にね笑」
中村「アカゲラ東に住んでる農家の橋本のおばあちゃん」
かおる「あーあの時、つばめがお世話になりましたね！」
中村「そうそう。橋本さんが、言ってたよ。
つばめちゃん、確かに学校のお友達の名誉や心を傷つけてしまったかもし

れないけど、学校行けなくなるほど追い込まれる必要のある子じゃないって。
つばめちゃんはあらゆるところに配慮がいく心優しい子で、何より気がきくから息子のお嫁さんになって欲しいって〜！」

つばめ「橋本さんは私の同世代の息子さんがいらっしゃるんですか？」

かおる「いないいない！もうおばあちゃんでちょっとボケてるの！
息子さんももう結婚してるし、お母さんと同世代だよ。」

中村「そのくらいつばめちゃんを気にいるほど、つばめちゃんは優しい子だってことだよ。」

S：踏切の音　カーンカーンカーンカーン

中村「あ、列車来たんじゃない？ハヤブサ行くの？」

かおる「つばめの部屋に荷物を取りに。」

中村「気をつけて。俺は仕事に行ってくるね。」

つばめ「ありがとうございました。」

中村「またなにかあったらなんでも相談してね。」

かおる「すみません！頼りにしてます！」

中村「でもやっとつばめちゃんと話せて良かった！」

つばめ「またよろしくお願いします。」

S：踏切の音　より近くで鳴る

中村「引き止めてごめん！いってらっしゃい。」

つばめ「行ってきます」

〇S23 列車・車内・朝
車窓をみつめるつばめ

M つばめ「この町はまるで鳥籠だった。
この町に溢れる噂は人と人を繋いでいる。
そんな町に私は、救われてきたんだ。」